

特別座談会

激動の時代において、
東京大学が果たすべき役割とは？
人類の未来に向けて、今、問われる「知のあり方」。
去る4月10日、その問いに答えるべく、
特別座談会が行われました。
濱田純一総長、五神真工学系研究科教授、
吉見俊哉情報学環教授の談話には
社会に開かれた、
次代の大学の姿が示唆されています。

知 の 公 共 性

世界を担う
東京大学を
目指して

五神 真

工学系研究科 教授

吉見俊哉

情報学環 教授

濱田純一

東京大学 総長



濱田 今日、社会は激しく揺れ動いています。これまで人類が作り上げてきた「概念」、そこには制度、文化、技術、意識、経済の仕組みなどすべて含まれるわけですが、そういう広い意味での「概念」そのものを見直して次の時代を創っていくべき時期なのだと思います。そのために、学術の役割が決定的に重要だと私は考えているのですが、その役割を端的に示すために「公共性」という言葉をもう一度、持ち出してみたいと思います。「公共性」という言葉は、かつては公共の福祉 *salus publica* といった形でも使われた古い言葉ですが、あえて古めかしい「公共性」を今、「知」の役割を問い直す軸としてみようということで座談会のテーマとさせていただきます。五神さん、吉見さんのお二人は、東京大学が持っている学術の「原理的な部分」と社会の課題に柔軟に対応していく「応用的な部分」の両側面を兼ね備えておられる方々だと思い、座談会への出席をお願いしました。まずは、お二人それぞれの経歴と研究について簡単にご紹介いただけますか？

五神 私は1976年に東大理科一類に入学しました。当時は「将来、科学を人類社会に役立てるような仕事をしたい」と思っていました。これをやろうと決めていたわけではありませんでした。それでいろいろな先生方のお話を聞いているうちに「基礎科学をやって自分の武器にしたい」と思い始め、物理学科に進学したんです。物理学科で学んでいる間も「基礎的な研究が社会にどのように活用されるのか」がいつも気になっていました。あるとき、先生にそのことをうかがったら「心配はない。真理を探求していけば、必ずそれが世の中に広がっていく」とのお答えをいただいて、迷わずに勉強しようと思った記憶があります。その後、「光と物質の関わり」をテーマに研究者の道に進みました。この分野は最近10年間で10人近いノーベル賞受賞者が出るほど発展著しい学問分野です。私は理学部で

助手までやって、30歳を過ぎた頃に工学部の物理工学科から誘われて工学部に移りました。工学部では、実に様々な学問があることや、それをどのように社会に展開できるかということ学びましたね。そして、最近では「好奇心に駆られて基礎的な研究を無制限にがんばり続ける活動が非常に大切であること。東大ではそういう活動が幅広く展開されていること」を痛感しています。学問も人間の営みのひとつなので、濱田総長のおっしゃる「知の公共性」をシステムティックに展開していく仕組みが今後、必要になると思っています。

吉見 今、五神さんのお話をうかがっていて、あらためて大きな共通点があることに気づきました。私も五神さんと同じ1976年に理科一類に入学しました。学部前期課程である駒場時代は演劇に狂いまして、当時、寮食北ホールと呼ばれた倉庫のようなスペースで演劇活動をしていました。劇作家・野田秀樹さんが東大で演劇活動をされていた頃です。演劇をやっている間に留年して、理系学生でありながら科学実験からどんどん足が遠のいていって(笑)。それで文系に転じ、後期課程では新設された教養学部教養学科関連社会科学分科に進みました。ですから、3、4年生のときも駒場で過ごしたんです。その頃、柏キャンパスや東大三極構造を作る際に重要な役割を果たされる原廣司先生(生産技術研究所・現名誉教授)とお話させていただく機会が多かったんですが、その原先生のお誘いで、学部卒業後に1年間、生産技術研究所の研究生をやりました。その後、当時はまだあった社会学研究科で修士課程・博士課程を過ごし、1987年に新聞研究所の助手に採用されました。やがて新聞研究所が社会情報研究所に改組され、情報学環と合併するプロセスの中で研究者としてのキャリアを積んできたわけです。私は社会学をベースに「文化」を研究し続けてきました。「現代社会の日常意識」

や「メディアと都市空間」の研究をしてきました。昔、社会学の偉い先生から「君のやっていることまで社会学なのか」と言われたこともありましたが、あまり学問的でない、俗っぽいものを研究対象に選んでも、理論と方法論がしっかりしていれば学問になり得るという信念でやってきたつもりです。今、知識がどんどんデジタル化し、グローバルに流通し、コモディライズされていく現代は、近代的な価値体系が崩れていく「ポスト・モダン」、書物をベースにした知からデジタル化された知に進む「ポスト・ゲーテンベルク」、近代国家の枠組みが動揺する「ポスト・ネーション」などの現象が折り重なった時代状況になっていると思います。この状況の中で、「知の公共性」を担える場所が大学以外にあまりなくなってきていて、その際、東京大学は大きな役割を果たすことになると思います。

多様性と可能性に支えられた 東京大学のパワー

濱田 今のお二人の経歴のお話からも、東京大学には、原理的な部分をベースにしながらも自由に動き回れる「学問的な幅の広さ、懐の深さ」があると感じます。それは社会への貢献において、そして時代を創っていくときに、大きな「力」になると思います。小さな組織では縦割りになってしまわざるを得ないこともあるでしょうが、組織が大きい東大の場合は一応、縦割りにはなっていない、問題意識さえ持てばどんどん横にも広がっていく。ディシプリンの面での底力と新しい課題への柔軟性を兼ね備えているところが東大の面白さだと思います。

五神 先ほど、吉見さんから原廣司先生のお話がありましたが、実は私も大学1年生の頃、原先生の全学一般ゼミをとっていて、様々な興味深いお話をうかがいました。ゼミの内容は、近現代建築史を基軸に、非常に多岐にわたった文化論の話が多くて、とても面白かったです。ま

た、同時期に駒場図書館にデュシャンの『大ガラス』【編集部註：美術家、マルセル・デュシャンが1915年に制作を始め、1923年に未完のまま放棄した作品『花嫁は彼女の独身者たちによって裸にされて、さえも』。通称：大ガラス】のレプリカを制作する大プロジェクトをやっていて、たまたま私のクラスの工学の横山正先生（教養学部・現名誉教授）がそのプロジェクトに熱中しておられました。デュシャンが残した哲学的なメモ類の分析から始まり、フィラデルフィア美術館所蔵の『大ガラス』を撮影した細部写真数千枚の分析、正確な複製をするための技術論などを経て複製作業を行っていくわけです。文系・理系の学問を駆使してそこまでのめり込む「文化の厚み」を肌で感じ、「さすが東大だな」と強く思いましたね。その後、私自身はきわめてオーソドックスな学問分野を選択したのですが、そういう「文化の厚み」から非常に強い影響を受けたと思います。東大の中で様々な人が様々な「知の営み」を展開しているという点に「パワー」を感じましたし、それは今も続いていると思います。

濱田 「パワー」を感じるチャンスが、この大学のあちこちに転がっているということなんじゃないかな。

吉見 特に、駒場での2年間（学部前期課程）はそういう「パワー」に触れるチャンスに富んでいて、いわば、東大が持っているひとつの財産だと思います。18歳から22歳ぐらいまでの間は、人生がど

う転がっていくか解らない時期ですよ。そんな時期に理科一類から文科三類までの全員が駒場に集合して、そこでいろいろなことが起こっていく。あの空間は東大ならではの「多様性」と「可能性」を維持しているように思えます。

濱田 その「多様性と可能性から導き出されるパワー」を、どのように社会に役立てていくべきかということが今、問われているのだと思います。

五神 ええ。そもそも、たった130年の年月で自然発生的にこれだけの規模・内容の大学ができあがることはあり得ないと思うんですね。日本が近代国家を作っていく中で、意識的に「設計して」作ってきた部分がとても大きいと思います。5年前の法人化によって、その大部分は解き放たれて、我々はある種の自由と責任を与えられた。それをどう認識し、活用するかが社会から求められているわけですね。

濱田 たしかに東大は、誕生以来、「国家社会のために」という大前提のもとに歩んできましたね。ですから、当初、「設計されたもの」であったことは間違いありませんが、その後は、特定の誰か、あるいは特定の政治的決定がこの大学を作ってきたのではなく、大学と社会あるいは国家とのインタラクション、一種の相互作用が働いて出来上がってきたのだと思うんです。また、社会から大学への期待を東大が敏感に受け止めることによっ

て東大の役割、広く言えば「公共性」も醸成されてきたのではないかと感じますね。

五神 当初は設計されたものですが、節目節目で起こった大きな改革……帝国大学になったとき、戦後の学制改革、5年前の法人化……そういう大改革の際には、誰かが作っ

たシナリオではなく、政治、経済、社会のパワーによって改革のトリガーがかけられてきた。その時々大学の構成員が「改革後に、どんな軸を守り育てるか」を模索してきた結果が現在の東大の姿なのだろうと思います。

吉見 そんなふうにして築き上げられてきた東大の知的資源ですが、まだまだ使いきれていない気がします。社会の様々な課題の変化に東大の仕組みがついていないですし、東大のポテンシャルを学生の教育に十分に活かしていません。このあたりは、まだまだ可能性があると思います。

社会の期待に応えるために「学術の意思」を示す

濱田 それでは、少し話題を変えましょう。いまの「時代」から公共性というものを考えようとすると、たとえば現在の社会の中で「格差」といったものが大きくなってきていますね。経済的な格差、技術を使うリテラシーの差、都市と地方の関係……「格差」というべきか、もう少し広い意味で「多様化」というべきか、とにかくそのような時代状況になっている。お二人は、東京大学が対応していかねばならない「時代」をどのように捉えていらっしゃるでしょうか？

吉見 私個人の認識としては、おそらく「空洞化」と呼ぶべき状況だと思っています。1970年代の終わり頃から、資本や人の流通が急速に世界中に広がり始めた。福祉国家の時代からグローバリゼーションの時代へ変化していくプロセスですが、これには為替レートの流動化が大きかった。資本が国境を越えて自由に流れるようになっていった。資本は労働力の安いところへ移動していきますから、日本の企業もどんどん外に出ていく。まずは東南アジアへ。やがて中国へ。基幹産業が生産拠点を海外に移していく。経済のレベルでの「空洞化」が始まります。国内



では、たとえば地方に「限界集落」が増えたり、都市でも経済的な格差が出てきたり。それによって、従来、「国全体が豊かになる」という形でやっていた日本は、「格差を許容しながら、勝つところでは確実に勝とう」といった形に変わっていった。この大きな流れによって、2000年代の日本の社会では、流れから取り残されていったもの、空洞化した部分が大きな問題としてクローズアップされてきました。労働力の非正規雇用の拡大などもその一端ですね。そのような大きな流れに対して、「知」、とりわけ大学はどうしていたか。大学の動きは世間の動きよりも10年～15年くらい遅くて、国立大学法人化以前は昔の体制でやっていた。しかし、大学も社会の流れに適応しなくてはならない。それが現在の大学の課題だと思います。たとえば、グローバリゼーションに適応するために国際化が必要ですね。理系分野はほとんど海外に出て行っていますが、文系分野まで含めて考えると、まだまだですね。その一方で、世界の流れに適応するために「知」を次々に生産し、アウトプットしていく過程で、「知」そのものの中身が空洞化してくる怖れもある。経済レベルで起きたことが学問の世界に起きないようにするためにある種のセーフティネットが必要だということです。それこそが「知の公共性」なのかもしれません。いずれにせよ、知の空洞化を防ぐ方策を講じていかなければ大学の未来は拓かれていかない気がします。

五神 私も世界の変化に関しては吉見さんと同じように感じていますね。1970年代以降、情報の共有・流通の手段が圧倒的に進歩し、何かが起こると、一晩で地球の裏側まで影響が及ぶという状況になってきた。人間がコントロールできる「情報のスピード」を超えてしまったわけで、20世紀に構築した社会システムとの齟齬が出てきてしまった。そんな時代のスピード感に対応するために学問には

「遠い未来を見すえた方策を考えながら、現在の問題にその方策を反映させる」という洞察力が求められるようになってきた。しかし、時間が進むスピードが一桁速くなったとしても大学は慌てる必要はないと感じています。社会は学術に対して「普遍性を武器に未来を拓く」ということを期待していると思うので。我々は学問の根幹に立ち返って「スピードを超えて存在する知的価値」を共有し、それを磨き上げていかねばならない。本質を見失わないように、遠い未来のビジョンを提示できる学問を創り続けていかねばならないと思います。さらに、科学技術を社会に活用する場においては、文系理系の分業など機能しないので、学問全体として捉える必要も出てきましたね。理系文系の違いというのはフェーズの違いに過ぎないと思います。明治初期に物理学教室を作った頃から、物理という言葉は世界共通だったんです。つまり、物理学はア・プリオリにグローバルな学問でした。しかし、現代では自然科学のみならず、社会科学・人文科学でも活動範囲はグローバルになってきています。東大は文系理系の枠を超えて「社会に活用できる学問」を総体として提示していかなければならないと思いますね。

濱田 今、五神さんが言われたことは、別の言い方をすれば、社会に対して「学術の意思」を表すということなのだろうと思います。そういう時代になっているという気がするんです。従来、学術は一種の予測や裏づけのために使うことも多かったわけですが、これからは社会全体の方向性を見据えて、あるいは社会の中での学術の位置をきちんと設計し、そのありように対する意思をしっかりと打ち出していく時代なのではないでしょうか。

それが大学の「公共性」を支えていくことになると思うのです。

五神 私達、研究者は「真理の探究」に対して常に謙虚な態度、謙抑的な態度をとってきました。今後もずっとそうしていくべきだと思います。しかし、「何のために学問をやっているのか。学術はどうあるべきか」という意思を示すことは、「真理の探究」に対する謙虚な態度と矛盾する行為ではないと思います。従来の学術は、むしろ、そのような意思を表すことを避けてきた感がありますが、今後はどんどん意思を示していくべきですね。

吉見 そのような「学術の意思」を示すために、今後、大学の広報はとても大切になってきますね。今回の座談会は広報誌『淡青』に掲載されますが、そのように、社会に対して「学術の意思」をアピールし続けていく必要がある。「広報活動」は英語にすると“public relations”。単に情報を発信するだけでなく、社会とのパブリックな関係性を創っていくことが広報だと思います。いわば、社会とのインタラクションの仕組みをどう創るかという「関係のデザインや設計」ですね。今後はそのための戦略も必要になっていくのではないかと思います。

五神 社会が大学に対して期待していることは「普通の市民よりも『先を予見する能力』を持っているはずだ」ということですね。だから、東京大学は、人類の未来に関して学術総体として発信する必要があります。そして、大学自体をどのように変えていくのかということも同時に発信します。より説得力のあるメッセージを発信すれば、それが原動力となって大学も社会も変わっていく。それには

駒場での2年間は東大が持っている財産のひとつです



「東大のパワー」をどのように社会に役立てていくか



photo: **Misato IWASAKI**
三四郎池畔 14:30

「意思をもって発信していくこと」を軸にすえるべきではないかと思います。

学術の未来像を提示していくということ

吉見 さきほど、五神さんが「遠くを見据えながら近くに反映する」とおっしゃいましたが、まさに、現代社会は様々な局面で、その態度が必要になってきていると思います。しかしながら、現実を眺めてみると……たとえば、「東大の学生の教育」というレベルに視点を落として考えてみても、あまり実現できていないなという気がしますね。学生達、特に大学院生達は将来のキャリアパスが非常に不安定化していることで疲弊しています。今、この勉強を、研究を続けていった後、「将来の自分はどうなっているのか」という部分がとても見えにくくなっている。さらに、キャリアパスが見えないということだけでなく、「この研究を続けて、それが未来の学問にどう繋がっていくのか」が見えない。だから、学術の意思を示し、発信していくことは、社会に対してだけでなく、学生に向けてもやらなければならないことだと思います。彼らのキャリアパスを示すとともに、学術の未来を提示すべきでしょうね。

濱田 たとえばですが、昨今、「教養の幅がある、応用力の高いドクターを」という社会からの要請が多いですね。いろいろなキャリアパスを開く教育が求められていると思います。

吉見 複眼的な教育が必要になってきた面は多々あると思います。しかし、さらにそれを越えて「社会と大学が共同で新たな価値を創る段階」まで進む必要がある。「30年後、50年後に向けてどんな社会を創るのか」というビジョンを社会に

発信して、社会とのコンセンサスを築き上げながら、「そのための人材づくりの仕組みはかくあるべきだ」と社会に納得させていく作業が必要だと思います。

濱田 単に社会の意見を受け入れるのでもなく、また、一方的に大学の考えを主張するのでもなく、第三の道を選択するということですね。そうした選択のプロセスを動かせること自体が、大学のもつ公共性の一部であるように思います。

五神 たとえば、今、東大の博士課程を修了した人達が世の中でリーダーとして大きく活躍するのは10年後、15年後ぐらいですね。そのときに「彼ら自身の手で社会を創っていく力」を、学問を通して与えられたかどうか……社会は大学にそれを求めているのだと思います。彼らが大学にいた頃に「真に新しいこと、未知なるものにしっかりと立ち向かい、それを突破するような活動」をしていたかどうか、そのときになって問われるということです。ですから、そのような活動の水準を上げていくことで、院生のキャリアパスなど、かなりの部分は解決できると思います。それから、東京大学の立場を考えると、学問を大きく広げるような力のある分野を優先することを社会から求められていますね。学問自体がどんどん変わっていくきっかけとなるような「一石」を求められている。そういう「一石」となる研究の場に深く関わって活動した人々は社会にとっても非常に重要な人材となっていくのではないのでしょうか。

濱田 そのような研究の具体的なイメージはどうでしょう？



五神 物理学の例ではいくつか挙げられます。たとえば、物理学の根源を調べる素粒子物理学は、深めれば深めるほど新たな「世界の見え方」が現れてきて、今や、宇宙全体の構造までひとつの数学で論じられるようになってきました。これは私が学生時代に学んだ内容と比べると大きく展開していますね。それから、物理学的な手法ということで考えると、昔はトライ&エラーを繰り返してデータを累積して予測する以外になかった分野においても、今では論理的な仕組みを解明することによって合理的に最適解を見つけられるようになってきました。そして、それを工学に活用するといった展開がなされているわけです。そのような「学問の広がり」を考えると、学生の頃に「真理を探究していけば、必ずそれが世の中に広がっていく」とアドバイスしてくださった先生の言葉を思い出して、まさにそういうものなんだなと感じます。もちろん、現在、流行っている分野、広がっている分野が必ずしも未来に向けて広がっていくとは限りません。そのあたりの見極めはなかなか難しく、本当に高いレベルの学識や学術的信念が必要なんですね。そのような見極めの能力を研ぎ澄ました研究者達が集まっている大学というのが、私にとっての理想の東京大学のイメージですね。

吉見 文系の学問の未来像を見極めようとした場合、現時点で予測できることは「資料へのアクセシビリティの爆発的拡大」です。今後、世界中の図書資料・文

東大は、研究だけでなく
人材としても世界を担いたい

日本という「個性」を
意識したうえで世界を担うべき



献がどんどんデジタル化していくことで、20年後30年後には、あらゆる資料へのアクセスと操作性がきわめて容易になるだろうと予測できます。そのことは社会科学や人文科学の研究スタイルを劇的に変えてしまうだろうと思いますね。その一方で、数年後という短いスパンでの文系学問の未来像を考えると、なかなか見えてこない。だから、今の大学院生達は、数年後のキャリアパスの予測と30年後の学問の未来像が繋がらない状態にあると思います。「理想と現実の間の距離」はかなり大きいと思いますね。

濱田 たしかに、学生達の切迫感からすれば、その距離は決定的な意味を持つものですね。私達が、社会に対して、卒業生の進路も含めた「知の活かし方」について、一種のプレゼンテーションをしていくことも大切なだろうと改めて思います。

東大が世界を担うために強化すべき国際化戦略

濱田 東京大学は「国際化への対応」を大学運営の最重要課題のひとつだと考えています。当然、この座談会で話題にしている「公共性」も「世界全体を視野に入れた公共性」を考えていくべきでしょう。4月に発表した総長としての所信表明に「世界を担う知の拠点」というフレーズを盛り込みました。小宮山宏前総長は「世界の知の頂点を目指す」と言われましたが、それはとても大切なことだと思います。私はそこから「なぜ、世界の知の頂点を目指すのか」を考えてみたんです。すると、やはり東京大学が「世界を担う」ためだと思ったわけですね。この「担う」というのは、もちろん一面では「研究成果をどんどん上げて最高水準の知を世界に提供していく」という意味なのですが、同時に「東京大学の卒業生に、世界中で、人類の未来を担う活動をしてほしい」という思いもあります。つまり、研究だけでなく、人材としても世

界を担うという部分を強調したいのです。実際、東大の卒業生は世界各地でビジネス、文化的活動、研究など活躍しているわけですから、そういう活躍をもっと社会に見せていきたいと思ったり、そういう動きをネットワーク化し、また励ましていきたいと思っています。様々な先輩の活躍を見せることは、今の学生達の励みにもなると思うんです。

五神 東大が「世界を担う」とすれば、それは「日本という個性を意識したうえで世界を担う」ということなのではないかと私は思います。これだけ高度な経済・文化を持っていて、しかも日本語で暮らしているということは、世界的に見て、とても特殊なわけですね。そういう特徴を学生達に体感してもらうことが大切なのではないかと思ったり。「世界中の日本」というものを意識するチャンスを与えるんです。たとえば、東大では、留学生や外国人研究者のための滞在施設として、柏キャンパスにインターナショナル・ロッジを作る計画がありますね。その中に「日本人学生が留学生と一緒に生活できるビレッジ」を作って共同生活をしてもらうのも良いんじゃないかと思ったり。日本語が分からない留学生が入ってきたら、日本人学生がサポーターになって一緒に生活していく。ゴミ出し、掃除、草取りなど、日常の所作を留学生と一緒にやっていくだけでも「世界には自分とは違う文化を持った人々がいるんだな。自分とは違う考え方やビヘイビアの人がこんなにたくさんいるのだ」ということを意識できるわけです。

吉見 東京大学が世界を担

う際に非常に重要なことがひとつあります。それは「東京大学をはじめとする日本のトップユニバーシティは、自らのアカデミック・システムの中だけで世界的にトップレベルの人々を養成できる、非欧米世界においてはほとんど唯一の大学である」ということです。たとえば、韓国、台湾、東南アジアのトップレベルの大学では、米国か英国に留学してPh.D(博士号)を取って母校に戻ってくるという回路が確立されていますね。良くも悪くもアメリカンなアカデミック・システムを適用して構造化しているわけです。しかし、東大のアカデミック・システムは今なお、次世代の育成において自律性を保っている。これはかつて日本が帝国であった頃の遺産という見方もできますが、実はこれは非常に重要な遺産だと思います。東京大学は、米国の大学による世界の担い方や英国の大学による世界の担い方とは違った「アジアに根ざした、



世界の担い方」ができる。学術の多様性という点から考えても、米国のアイビーリーグの各大学や英国のオックスフォード大学・ケンブリッジ大学が未来永劫、世界のトップであり続けるという形は、あまり健全ではないと思います。アジアから世界の学術を担うことも大切なんです。では、東大が世界を担おうとする際に、やるべきことは何か。まず、最初に、「アジアのトップユニバーシティと連携し、アジアベースで成立するアカデミック・システムを作り上げること」ですね。中国の清華大学、韓国のソウル大学、シンガポール国立大学などと連携して、日本あるいはアジアのアカデミック・システムの中から世界をリードする人材を輩出していく仕組みを21世紀の中葉までに作り上げていく。これは日本のためだけでなく、世界のためになる施策だと思います。二番目にやることは「世界をリードする人材が東京大学に留学してくるよ

うな仕組み」を作ること。具体的には、世界のトップの人材が東大に来てくれるような「戦略的なスカラシップ（奨学金）の制度を作る」ということですね。一昨年、私の所属する情報学環ではアジア情報社会コースという英語ベースのプログラムを作ったんです。「ITがアジアをどう変えるか」という研究をする魅力的なプログラムなので、アジア各地から非常に優秀な学生が志願してきます。しかし、そういう優秀な学生達は同時に米国の有名大学にも志願していて、両方から合格通知をもらうと、必ず「奨学金は出せませんか」と聞いてくるんですよ。こちらは奨学金を出す仕組みをまだ十分に持っていないので「出せない」と答えると、その人は米国の大学に行ってしまうわけです。現在の奨学金制度は経済的に苦しい留学生に向けたものが多いのですが、きわめて優秀なアジアの人材を東大に呼ぶための戦略的な奨学金制度が必要だと思

います。三番目にやるべきことは「日本人学生の『海外留学』に対する意識を変えること」。日本で育って東大に入ってきた日本人の学生達は、非常に優秀な人も含めて、あまり海外に出たがらない傾向があります。英語は話せる、少なくともよく読める人達なのですが、留学したり国際学会に出て行ったりということに熱心ではない。これは考えてみれば当然のことかもしれません。東大を卒業して良いところに就職したり大学院に入ったりすれば、わざわざ留学をしなくても、良いキャリアパスに乗っていることになるでしょうから。だから、彼らの目には、海外に行って、他流試合していくことが無駄に見えてしまっているのかもしれない

ん。そういう意識を変えていかなければいけないと思っています。

五神 今、吉見さんがおっしゃった、「日本人学生があまり海外に出たがらない」という傾向は理系分野でも時々、感じることがありますね。しかし、彼らが良いキャリアパスに乗っているというのは、幻想かもしれないですね。彼らの今後20年30年の人生を考えれば、そんなに甘いものではないと思いますよ。本当はもっとアグレッシブにやっていかなければいけないはず。去年、工学系研究科で光科学の研究センター【編集部註：工学系研究科附属総合研究機構光量子科学研究センター】を立ち上げたんですが、産学連携や人材育成のスキームを特区的にいろいろやろうと考えています。その中に「もっと海外の学生にも教えよう」というプランがあります。しかし、中国や韓国の優秀な学生はまず米国の大学院を志願するんです。だから、彼らを東大に呼ぶために米国の大学院入試と同じ仕組みを導入できればよいと思っています。そしてさらに、同じ仕組みで日本人学生も志願できるようにしようと思っています。苦労して日本にやってくる留学生や目的意識が明確な留学生と切磋琢磨することで日本人学生をエンカレッジすることができるだろうということ。ゆくゆくは、その仕組みが大学院後期課程の研究者育成モデルになるのではないかと考えています。

吉見 スカラシップ（奨学金）とアコモデーション（滞在施設）の問題はその際にクリアしなければならない問題ですね。

五神 米国のトップ大学では、年に5万ドルの奨学金を出すところもあります。授業料プラス生活費という形が標準化しているわけです。日本でもそういうサポートが必要ですね。ハーバード大学か、東大かという選択肢を持つ人を東大に呼ぶには年間300万円ぐらいの奨学金を出



すべきかなと試算しています。

吉見 それなら十分ですね。あまり低いと他の大学に行ってしまうから。

濱田 そうですね。奨学金や滞在施設など、欧米の大学と同じ条件・環境が整備されたときに学生がどの大学を選ぶのかということは、ある意味では、非常に明快な大学ランキングになるかもしれません。

施設管理、予算管理、人材管理。 新たな仕組みの必要性

五神 さきほど、社会における「格差」のお話がありましたが、現在の経済状況では留学生に限らず、地方から東大に入

スペースを整備していかなければならないんですが、他方で、既存の建物の老朽化が進んできているという問題がある。適正な施設管理、スペース配分のあり方を今の時点でしっかり考えておかないと、今後、本当に深刻になって、教育・研究の水準に致命的な影響を与えかねないと考えています。

五神 従来の意識としては、一度、広い研究室スペースをもらった「所有財産」を得たという感覚が強かったと思うんです。だからこそ、そのスペースを死守しようとする。それではスペース再配分など不可能になってしまいます。今後は、「もらったスペース」ではなくて「たまたま、使わせてもらっているスペース」と

いう意識を皆が持っていかなければいけないですね。本郷の一等地に100㎡のスペースをもらって研究室を開いている先生は、それに見合うくらいの効果的な研究教育活動を行う義務があると考えたとき、もっとコストエフェクティブな管理ができるだろうと思うんです。

ます。多様な学問を流行り廃りと関係なく守ることを、学識をもって判断していく必要がありますよね。ある程度、広い範囲の分野の人々が時間をかけて議論していかなければならない。そうすることが学術の安定性にもなります。新しい分野、新しく広がっていく分野がどこから出てくるかは予測不可能ですから、規模の大きさによってそれをカバーしていくことも東大の力のひとつだと思います。予算の配分に関して、最近、私が問題だと思っていることは「運営費交付金がほとんど管理コストとして使われている」という点です。本来、国からもらった運営費交付金は、多様な学問を支えていくためのベースとして使わなければならない。学問の多様性を維持するために、国民が納得して一定額を負ってくれているということなのだと思います。しかし、実際には組織を運営・管理するための管理コストとして消えている。今は流行っていないかとも、いつ、広がり始めるか分からない研究を支えるための資金がなくなりつつあるのではないかという気がします。それから、現在の予算の再配分の方式では、どんなに学術的に優れた研究でも、新たな研究内容を提案できないと10年で1割の予算が削られていきます。

吉見 学問の多様性を守るためにも、新しいことをしなければ予算がもらえないというのは問題ですね。

五神 「非常に重要な研究なので予算を減らさないでください」という理由では予算案が通らないんです。

濱田 たしかにそのことは大きな問題だと思います。私は、所信表明の中で、「時代にもはやされる研究だけではなく、多彩な学問分野を時の制約を越えて確実に維持し発展させ続けることは、学術の基盤を豊かなものとし、創造性を生み出す源となります」と記しました。新しい社会的課題に対する挑戦とともに、こう

ってきた学生などは日々の生活、特に住居の費用が大きな負担になっていますね。本郷の大学院に通うためには、この近辺に10万円近い家賃を払ってアパートを借りて生活する必要がある。研究者の道を目指すコストがとて高いわけです。だから、東大の土地の上に低廉な住居施設・滞在施設を作るべきだと思います。そういうスペースを学内に作れば、月に3、4万円ほどできちんとした住居を確保できます。留学生向けに限らず、そういう施設は必要だと思うんですよ。

濱田 たしかにそうです。そのような住居施設の話も含めて、今、私は学内施設全体の問題がとて気になっているんです。研究者や学生が活動していくための

濱田 施設管理の問題、とりわけスペース配分の問題は、予算の配分や人の配分とも大きく関わってきます。これは学問の価値に対する評価となるとところがあるのでとても難しい問題です。たとえば、人の配分は、採用可能数再配分の仕組みの中で、評価を入れようとしているわけですが、その評価が部分的には適正であっても大学全体として適正かどうかは非常に見えにくい。そもそも、東大の規模や学問の幅広さを考えたときに、全体適正がどのように成り立つのかということですが。

五神 東大の持っている、大きく広く深い学術全体を一元的な評価軸で評価するのは不可能ですし、必ず間違いが起こり



した学術の基盤をどのように担保していくのか、しっかりと考えていきたいと思っています。

今、すぐにでも必要な アカデミック・アドミニストレーター

吉見 お金と人の管理についてとても気になることがあります。国立大学法人化以降、外部資金によって、プロジェクトを立ち上げたり、特任教職員を雇用する形が増えてきましたね。ところが、急速に拡大したためか、そのような新プロジェクトの組織が管理・運営の能力を十分に備えているとは限らない。管理・運営の専任者がいなくて、担当教員が行っている場合も多い。だから、喫緊の問題として、外部資金によるプロジェクト・組織の管理の仕組みを整備する必要があると感じています。

五神 そもそも、「管理・運営の業務を教員がやることは本当に正しいのだろうか」という問題もありますね。

吉見 そうですね。常にそれが正しいわけではありませんよね。

五神 研究と教育によって知的価値を産み出すスタッフとして教員を雇用しているのに、その人々が管理・運営に時間を使うことは大学全体として効率が悪い。しかし、職員達も法人化以前と比べると膨大な仕事量を抱え込むようになっていっている。その負担を短時間雇用職員と派遣職員のみで補おうとするのは、あまりにも無謀な気がします。大学全体として人件費が減ってきているので、早急に、合理的な判断による新たな仕組みを考えないと皆が困ってしまうはずですね。

濱田 教員の役割をどのように考えるかは、本当に根本的な問題です。従来は「管理・運営業務も、とにかく教員が中心になってやる。それによってこそ自治が成り立つのだ」という発想でやってきたわ

けですね。おそらく、ここまで教員がやれている大学は他には少ないと思います。それが意味では東大の誇りでもあるんですが、やはり、「どこまで教員がやるのか」という問題は合理的に考え直さなければいけない。しかし、完全に割りきって「先生方は研究・教育だけに専念してください」と言うことができるでしょうか？ もちろん仕事の仕分けは可能だと思うんですが、問題は教員の意識ですね。やはり東大の先生方は口を出さず、また、ある程度、できるから自分でやってしまう。

五神 そこが非常に問題ですね。たとえば、教員数の外国人比率を上げていこうというときに、今のようやり方を続けるなら、教員がやっている管理・運営業務はすべて日本人教員が担い続けることになりますから。

濱田 たしかに、外国人教員を増やそうとする際にそれがネックになりそうですね。教授会のときに日本語で管理・運営の話ができるかという部分も引っかかってくる。

五神 何でも教員がやっていく運営体制では、今後、厳しいと思います。ちょっとできるからといって、先生方がやるという形はたぶん間違いですね。

濱田 そうですね。たぶん間違いですね。かつては、カーテンの色まで教員が議論するという感じでしたから（笑）。

吉見 カーテンの色ぐらいなら教員が首を突っ込むのも良いんですが（笑）。さきほど話した外部資金によるプロジェクトの場合などは、特任教職員に誰を雇うか、どういう待遇で雇うかといった雇用

や予算管理がかなり自由に担当教員に任されている場合もある。これは非常にリスクが大きいと思います。

五神 雇用に関しては、労務管理という面で一般教員には備わっていない能力が求められるはずですね。外部資金が増えれば増えるほど労務管理の規模も大きくなっていく。かといって、一般職員に労務管理をお願いした場合、やはり、研究・教育の専門的部分との整合性を判断するのは難しいと思うし。

吉見 国立大学法人化の際に「これからの事務職員は教員と対等にやるために、『アカデミック・アドミニストレーター』になっていくのだ」と謳われました。それがまだ十分に実現していない状況ですが、現実のほうがどんどん進んでしまっている。部局でも大学全体でも、専門職的なポジションとしてアカデミック・アドミニストレーターを必要とし始めている。今、すぐにでも育ててほしいところですね。

濱田 乱暴ですが、試しに「この人はそういう役目だ」という形で、強引に配置してしまうという手もあるかもしれません。通常のやり方ならば、アカデミック・アドミニストレーターは就業規則上どんな位置づけで、どんな役割があって、どんな権限があって、どんな待遇でという具合に全部整理してから「さあ、始めましょう」ということになるんだと思います。しかし、あるポジションをアカデミック・アドミニストレーターであると決めてしまっただけで「とりあえず、その人のところに行けば基本的なことはすべて管理されていて、それを行う権限を持っている」という形にするほうが現実的だし、早いかもしれないですね。

教員が何でもやる今の
運営体制はたぶん間違いですね

早急にアカデミック・
アドミニストレーターの養成を



吉見 賛成です。今、この問題の一番の被害者は若手研究者です。特に任期付きの助教・研究員・ポスドクなどがとても苦しんでいる。肝心の研究よりも管理・運営に忙殺されているんですよ。

文系共通の大問題。 書庫の整備と資料のデジタル化

濱田 あとひとつ、文系の先生なら誰もが頭を悩ませている問題として、「書庫」の話があります。研究室や図書室に資料・文献がどんどん増えていくわけだけれど、それを収納するスペースがない。十分な広さの書庫を作ってほしい。もう、これは文系の悲願と言っても良い問題です。たとえば、柏キャンパスには大きくて最新機能を持った書庫（柏地区図書館）がありますね。しかし、そこを利用するとしても、文系の研究者のほとんどは本郷キャンパスや駒場キャンパスにいますから、やはり、遠い。文系の先生には「物としての本が身近にあることが大切なんだ」とおっしゃる方が多いので、書庫をどうするかという問題は早急に取り組みが必要だと思います。

吉見 文系の研究者は問題意識や研究対象へのアプローチがばらばらなので、分野を超えた共同プロジェクトがなかなか展開できにくいという状況があります。しかし、すべての文系研究者が共通して問題意識を持てる対象といえば、「書庫」の問題なんですね。文系学問全体を強化・安定・発展させるための最大のポイントは「資料・文献の保存、管理、活用」に関する共通の仕組みを作ることなのではないかと思います。

濱田 そうですね。誰もがそれを望んでいるでしょう。

吉見 その仕組みの実現には、やることが2つあると思います。ひとつは書庫の問題、もうひとつはデジタル化の問題です。まず、書庫の問題ですが、もちろん、

文系共通の大書庫を本郷の地に作る事が理想です。しかし、本郷キャンパスのどこを見ても、到底、そんな大きな建物を建てるスペースがないという気がします。ですから、以前から話がある、文系の高等研究所構想【編集部註：小宮山アクション・プランに謳われた構想のひとつ】と次世代書庫構想をミックスするというやり方もあるかもしれません。いずれにせよ、柏キャンパスの利用だけでなく、様々な「解」を探るべきだと思いますね。それから、デジタル化に関しては、東京大学が自らの資産として資料・文献をデジタル化し、それを活用していく仕組みを作るべきでしょう。グーグルに権利を売ってしまうのではなく、自分達で管理することが東大の知的資源を充実させていくために大切なことですね。そうやって、自らデジタル化したものについて、部局の枠を超えて全学の学生・研究者が共有できるデジタルプラットフォームを作っていくべきです。しかし、特に教育の面から考えると、学生達がデジタルな知識ベースを使っていくうえで、ちょっと気になる点もあります……私は書庫に入って資料・文献を探していくことが好きなので、図書館などの書庫に何日も入り浸りになって探すことがかつてはありました。もちろん、今もそうしたいのですが……そうしていると、最初は書架が並んでいるだけの空間だったのに、だんだん頭の中で構造化されてマッピングされてくる。その書庫内での土地勘のようなものが出来てきて「こういう本は、あのあたりの書架にあるだろう」ということが解ってくるんです。いわば、書庫の地理学が身についてくる。この「身についてくる」ということが大切で、文系の研究者の多くは「自分の中で書庫そのものが構造化されていく経験」をしたことがあると思うんです。デジタルベースで学生の教育をしていくと、そういう感覚を学生達に習得させるのは難しいかもしれません。人類学者になるためにフィールドワークの経験が欠かせないのと同

じ意味で、やはり、文系全般の研究者を養成するためには「資料・文献に浸らせるトレーニング」が欠かせないと思うんですよ。

濱田 その感覚は私もよく解ります。書庫の中でうろろしているときにいろいろなテーマが思い浮かんだり、頭の中でマッピングできてくる。そういうことは理系の学問でもあるんですか？

五神 私の専門の工学系などでも資料・文献は大切です。ですから、文献をいろいろと探し回ることもあります。ただ、理系の場合、現在はその作業がほとんどオンライン上でできてしまう。私の場合、資料・文献を探した後に「こういう分野に関してもっと詳しく調べよう」と決めて、必ず欲しくなるのは「教科書」なんです。ある程度、歴史がある分野なら必ず教科書があるはずですから。しかし、教科書を探すのはなかなか難しいですね。東大の書庫でも教科書の品揃えはあまり良くはないです。それから、これは私個人の問題なんですが、日頃から「多少違うテーマだな」と思ってもおもしろそうだったら買ってしまふ習性があるので、家の中が本だらけになっていきます（笑）。しかしそれも大切で、たとえば「次にどんな研究をしようか」と考える際に10年前にニューヨークの街角でたまたま見つけて買った本が突然、役に立ったりすることもある。だから、理系の研究者にとっても資料・文献は大切だろうと思います。

濱田 そういうことであれば、書庫の話についても理系の先生方の理解を得ることができそうですね。

五神 文系の場合、たしかに本の量は膨大だと思います。しかし、大書庫に必要な規模としては、大雑把に考えて現在の総量の2倍が入るスペースがあれば事足りるのではないのでしょうか。そのくらい

の規模であれば、施設管理の工夫で本郷キャンパスにスペースを作れると思いますよ。「何が大切か」という優先順位のコンセンサスがとれれば、スペースは出てきます。スペースに対する考え方を切り換えていくということですね。

知の公共性を醸成していくために

濱田 今日は「知の公共性」をテーマに幅広いお話をうかがいました。多様性と可能性を持つ「東大のパワー」を社会に活かしていくために意思を持って学術を磨き上げていくことが、この時代に應えるための東大の使命、すなわち「知の公共性」であろうと思います。また、そのような使命を十分に実現するために、大学の国際化を進め、施設・予算・人材を適正に活用し、さらには資料・文献を効果的に管理していくことが、やはり大切なのだとあらためて認識しました。

五神 法人化という大激変に際して、私達には、目標を見失わないための「旗」が必要でした。小宮山宏前総長が掲げた「世界の知の頂点を目指す」という言葉は、そういう意味で、きわめて明確な「旗」でした。あれから4年間の月日を経た現在、頂点を目指すだけでは解決しないことが我々にも見えてきた。そのために必要なのが「知の公共性」なのだと思います。東京大学は日本全体の博士課程学生の約10%を擁している大学です。その規模から立ち現れる真の価値を今後は活かしていくべきだと感じています。

吉見 先ほども申し上げたように、世界は、福祉国家の時代、ネオリベリズムと市場化の時代を経て、現在、新たなフェーズの数十年に入ろうとしているように思います。その新たなフェーズにおいては、福祉国家の時代とは別の意味の「公共性」がクローズアップされてくる可能性が高い。我々が担うべき「知の公共性」も、そのような新たな意味の「公共



五神真 Makoto GONOKAMI

1957年生まれ。80年東京大学理学部物理学科卒業。82年大学院理学系研究科修士課程修了。85年理学博士（東京大学）。88年工学部講師。90年助教授。98年より工学系研究科教授。01～08年工学系研究科附属量子相エレクトロニクス研究センター長。

吉見俊哉 Shunya YOSHIMI

1957年生まれ。81年東京大学教養学部相関社会科学分科卒業。87年大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。社会学修士（東京大学）。90年新聞研究所助教授、社会情報研究所助教授。00年教授。04年より大学院情報学環教授。06～09年情報学環長・学際情報学府長。

性」に向けての学術からの挑戦といえるのではないのでしょうか。

濱田 今後、東京大学の使命はますます重くなっていくということだと思います。私はつねづね、東京大学総長のリーダーシップというのは、教職員や学生の持っている力を最大限に引き出して大学全体を動かしていく力だと言っていますが、今日はお二人からとても有意義なお話を

うかがえたことで、その考え方が正しいことを実感できる座談会になりました。これからも、いろいろな形で、教職員や学生の皆さんが持っている力をどんどん引き出していけるような大学運営をしていきたいと思っています。今日は長い時間、ありがとうございました。

2009年4月10日 東京大学文学部3号館地下・布文館にて

